

## 走力定期測定型町内体育祭などの復活、励行

### (背景)

東北大震災津波後の復興案では高台移転や土地嵩上げなどが主流になっている。しかしその都度坂道や階段のある道を何百メートルも走るようにして登りきれぬ人など何人いると考えているのだろうか疑問に思う。だからと言って、移転を別の方法でと考える補助金が出る出ないの話になり生産性のある話にならない。また、それらを教訓に転ばぬ先の杖とばかりに、全国的に高台へ住まいを移す人も出てきている。

そうしたとき心配になるのは高齢者や幼児を連れた若い人たちの体力・走力である。いざというときに高台にいればいいが、工場や商店街などが多く集まっている海拔の低いところで人は多くの時を過ごしているため、高台まで走って行ける体力・走力があるのかが問題になるし、高台にどんなにいい家、いいまちをつくってもそれが備わっていなければ人の命は救われるということにはならない。

### (内容・効果)

昔は町民体育祭やお祭り、防災訓練、年末町内大掃除など、体力・走力を伴う行事が町をあげた行事として結構あり、自らの体力を推し量るいい機会にもなっていた。今はそれがほとんどないので、行政や町内会、自治会が協議し、必要な団体も加えて従来の行事復活と全員参加を目指してはどうだろう。でなければ、少なくとも高台まで走って上がれる体力・走力づくりのため、町内体育祭を年2回程度義務として行なうようにしてはどうだろう。競技内容に400メートル持久走やだるま運び、綱引きなどを取り入れて定期的に体力・走力を確認しておけば、不足感を感じた人は本人も自覚して努力するようになるはずだし、地域としても応援すべき人を把握する目安になる。

加えてこうした取り組みを通して近隣相互の対話や助け合いの輪が広がるなど、地域の一致団結力は高まるはずである。